The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	サティヤ・ナーラーヤナ神願行譚
Author(s)	
Citation	印度民俗研究. 1978, 5, p. 17-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50308
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

サティヤ・ナーラーヤナ神願行譚

まえがき

以下はSatyanārāyaṇa Vrata Kathā をサンスクリット文より訳出したものである．Dehātī Pustak Bhaṇḍār版(Dillī)を底本に使用した．これにはJagannāth Sharmā によるヒンディー語訳及び註がついている．なお，不十分な個所を補うため次の諸本を参考にした．

(1) Ṭīkākār — kedārnāth Mishra 'Cancal', Shrī Satyanārāyaṇa Vrata Katha, Durgā Pustak Bhaṇḍār, Ilāhābād

(2) Ṭīkākār — Dharaṇīdhar Shāstrī Kāvyatīrth, Shrī Satyanārāyaṇa Vrata Kathā, Govarddhana Pustakālaya, Mathurā

(3) Satyanārāyaṇa Vrata Kathā Bhāṣā ṬiKā, Kāshī Pustakālaya, Mathurā

(4) Ṭīkākār — Daulatrām Gauṛ, Shrī Satyanārāyaṇa Vrata Kathā, Ṭhākurprasād & Sons Bookseller, Vārāṇasī

サティヤナーラーヤナ・ヴラタ・カターについては田中敏雄氏による考究並びに翻訳があるので参照されたい．

「ヒンディー語圏におけるサッティヤナーラーヤン・ヴラト・カターについて」『東京大学東洋文化研究所紀要』66, 1975

( )は原文のローマ字綴り及びヒンディー訳より補った箇所を示す．( )の数字は頌の番号を示す．

（訳　者）

第　一　章

ヴィヤーサ（Vyāsa）が語られたことである．昔，ナイミシャの森（Naimiṣāraṇya）で，ショウナカ（Shaunaka）以下（八万八千）のリシたちが，プラーナに精通するスータ（Sūta）[1]にお尋ねしたことがあった．（1）リシたちが問うて言うには，「願行（ヴラタ）や苦行によって願いのものが得られましょうか．その一部始終をお伺い致しとうございます．お説き下さい．マハームニよ．」（2）スータは，「昔，ナーラダ・リシに問われなされて，ヴィシュヌ神（Kamalāpati）がスラルシ（Surarṣi）〔すなわちナーラダ〕に語られたことをそのまま，お聞かせしよう．心してお聞きなされ．」と言って語られた．（3）

昔，ナーラダ・ヨーギーは，衆生を助けよう，と願い，数多の世界を巡っていて，人間界（Mṛtyuloka）へ来られたことがあった．(4)　そこで，すべての人間が，さまざまな苦しみにつながれ，自らの業のために，幾様もの生を享けて苦しんでいるのを御覧になって (5) どうしたら，この者たちの苦しみをすっかり滅することができようか，と思案なさり，ヴィシュヌ界 (Viṣnuloka) へ向かわれた．(6) そこで，光り輝く肌で，四本の手にはそれぞれ，法螺貝，円盤（チャクラ），杖，蓮華を持ち，野の花の花輪をおつけのナーラーヤナ神に (7) 拝謁して，神々の主への礼讃を始められた．「御姿は言葉も思念も超え，御力は限りなく，(8) 初めなく中なく終わりなく，属性を帯びずして属性を持たれ，一切のものの始めにあられ，信者たちの苦しみを滅して下さる方に敬礼致します．」(9) ヴィシュヌ神は，この礼讃を聞かれて，ナーラダ・リシにお声をかけられた．神のおっしゃるには，「ここへおいでなさったのは，如何なる用があってのことか．心に浮かんだところを (10) すべて話されるがよい．尊き方よ．私がお答えしよう．」ナーラダの申し上げなさるには，「人間界では，人間はすべて種々の苦しみにつながれ，更にその悪業のために，幾様もの生を享けて苦しむのでございます．(11) この苦しみを滅するための容易な方法についてお尋ね致しとうございます．御慈しみにより，どうかその一切をお説き頂けますよう．」(12) 神はおっしゃった．「よいぞ，汝の問いは人々のためを願ってのこと，迷妄より解き放たれるための方法を汝に授けよう．(13) 天界，地界を通じて二つとない，深大な功徳ある願行（ヴラタ）がある．汝の心ばえを愛でて今，それを明らかにしよう．(14) 正に，サティヤ・ナーラーヤナ神の願行（ヴラタ）を正しい作法に則り，行なうならば，即座に安楽を享け，死後は解脱[2]に到るであろう．」(15) 神のこの御言葉に，ナーラダ・ムニは更にお尋ねなされた．ナーラダの申し上げなさるには，「それを致しますれば，如何なる御利益がございましょうか．如何なる作法にて致せばよろしゅうございましょう．また，かつて如何なる方がそれをなさいましたか．(16) また，如何なる日になすべきでございましょう．そのすべてを詳しくお説き頂けますよう．」神は語られた．「これは，人の苦しみや悲しみなどを滅し，財や穀物を増し，(17) 幸運と子孫を授け，いずこにても勝利をもたらすものである．誠心と敬虔の念に満ちた日であればいつでも (18) その夕刻にサティヤ・ナーラーヤナ神を祀るがよい．バラモン，縁者と共に真剣に務めるよう．(19) 真心をこめて四半分増量の食物を盛った天食[3]を供えよ．すなわち，バナナ，牛酪（グリタ），牛乳，小麦のチュールナカ，[4] (20) 小麦のない場合は米の粉，[5] 粉砂糖或いは黒砂糖，これらの食物をすべて，四半分増しの量ずつ揃えて供えるがよい．(21) 縁者と共にバラモンの誦する物語を拝聴してのち，布施を差し上げるよう．その後，縁者と共に，バラモンたちを饗応するよう．(22) 御下がりを恭々しくいただき，歌や踊りなどを（徹宵して）なすこと．（外から来た人たちは）サティヤ・ナーラーヤナを念じながら，おのおの家路につくがよい．(23) このように行なうならば，人間たちの念願は必ずかなえられよう．特に悪しきカリの世 (kaliyuga) においては，これが最も容易な方法である．」

これにてスカンダ・プラーナ (Skanda Purāṇa)，レーヴァー編 (Rēvā Khaṇḍa)，サティヤ・ナーラーヤナ・ヴラタ・カター，第一章終わり．

註1　スータ　ここでは，Romaharṣaṇa（もしくは Lomaharṣaṇa）・Sūta のことで，ヴィヤーサ (Vyāsa)・リシの五人弟子の一人．プラーナを初めて語ったとされる．

2　解脱　ここではヴィシュヌ神の天国へ行くことを意味する．

3　四半分増量の食物を盛った天食　ヒンディー訳では，‘naivedya(pakkī mithāī) aur savāyā prasād’を供えよ，ととある．‘pakkī mithāī’はギーで揚げた菓子のこと．

4　チュールナカ（chūrṇaka）　穀物を油で揚げてから，つきくだいて粉としたもの．ヒンディー訳では，‘cūrṇa (āṭā)’とあり，小麦粉としている．

5　米の粉（shālichūrṇa）　ヒンディー訳では，‘sāthī(chāval) ka chūrṇa’とある．sāthīは，雨期に産する米の一品種で種を播いてより六十日で実るのでこの名がある．

第　二　章

スータは，「それでは，先にこのヴラタを行なったものの話をしよう．」と言って語られた．

美しいカーシーの都（Kāshīpura）にひとりの赤貧洗うがごときバラモンがおった．(1) 飢えと渇きに心乱れ，常に市中を徘徊しておった．バラモンを愛でられる神はこのバラモンの苦しみを御覧じて，(2) バラモンの老人に身をやつし，丁重にお尋ねになった．「もうし，バラモンどの．如何なる故あって，いつも市中を徘徊しておられますのじゃ．(3) そのわけを一部始終お尋ねしとうなった．のう，バラモンどの．どうかお話し下され．」バラモンが答えて言うには，「拙者はバラモンなれど，あまりの貧しさに乞食をして徘徊いたしております．(4) のう，御老体，もしもなにか術を御存知ならば，お教え下さらぬか．」老人の語るには，「サティヤ・ナーラーヤナ神とはヴィシュヌ神のことで，何事も望みのものを賜わる方じゃ．(5) バラモン殿，御身はかの神を礼拝し，その最高のヴラタを為されるがよい．これこそ，人がすべての苦しみを免れるというヴラタじゃ．」(6) ヴラタの方法を丁寧に説くと，老いたるバラモンに身をやつしたサティヤ・ナーラーヤナ神はその場で姿を消された．(7) 老人に教えられたヴラタを為そう，そう考えて，バラモンはその夜一睡もできなかった．(8) 朝，目覚めると，サティヤ・ナーラーヤナのヴラタを行なう決意をして，乞食に出た．(9) その日，バラモンは沢山のものを得ることができ，それを用いて家族と共にサティヤ神のヴラタを行なった．(10) そのヴラタの御利益で，あらゆる苦しみから解き放たれ，あらゆる幸運に恵まれて，裕福なバラモンとなりなさった．(11) その後も月ごとにヴラタをなした．バラモンはこのようにしてサティヤ・ナーラーヤナ神のヴラタを行ない，(12) あらゆる悪行より解き放たれて解脱を得なさったのである．「バラモンの方々よ．この地上でこのヴラタを行なえば，(13) 正にその時人間のすべての苦しみは滅する．このようにナーラーヤナ神がマハトマー・ナーラダに語られたのを (14) そのままお伝えしたが，さて次には何を語ろうか．」リシたちの問うて言うには，「そのバラモンから伝え聞いてこの地上で次にそのヴラタを行なったのはどなたなのか，(15) その一部始終をお聞き致しとうございます．私どもも信心が湧いてまいりました．」スータは，「地上で行なわれたこのヴラタのことを，各々方，お聞き下され．」と言って語られた．

ある時，かのバラモンは，その持てる富にふさわしい (16) ヴラタを親類，縁者を集めて為そうとしておいでじゃった．ちょうどその時，ひとりの薪売りがやって来た．(17) 外に薪を置いて，バラモンの家へ入った．ひどい喉の渇きに苦しんでいたその男は，バラモンがヴラタを行なうのを目

にして，(18) 平伏してバラモンに尋ねた．「何をなさっておられるのですか．それを為すと，どのような御利益がありましょうか．且那様，私めに詳しくお教え下さいまし．」(19) バラモンは答えて言うた．「これはサティヤ・ナーラーヤナ神のヴラタじゃ．あらゆる願いが叶えられるというもの．わしはこの神のおかげでありとあらゆる富を授かったのじゃ．」(20) 薪売りはバラモンからこのヴラタについて聞いて歓喜した．水を飲み，御下がりを頂き，町へ帰った．(21) サティヤ・ナーラーヤナ神を念じながら考えた．「今日，街で薪を売って得る金で，(22) この上なきサティヤ・ナーラーヤナ神のヴラタを行なおう．」こう心に決めて，頭に薪を載せ，(23) 富者たちの住む美しい街へ行った．その日たきぎはいつもの倍の値で売れた．(24) 男は喜んで，よく熟れたバナナ，砂糖牛酪(グリタ)，牛乳，小麦のチュールナカを (25) 四半分増の分量ずつ買い揃え，家へ戻った．縁者を集め，作法に則ってヴラタを行なった．(26) そのヴラタの御利益により，富と子孫に恵まれるようになり，この世で安楽を楽しんだのち，サティヤプラ[1] (Satyapura) へ行った．

これにてスカンダ・プラーナ，レーヴァー編，サティヤ・ナーラーヤナ・ヴラタ・カター，第二章終わり．

(註) 1 サティヤプラ　サティヤ・ナーラーヤナ神の都．ヴィシュヌ界．

第　三　章

スータは，「さて，先の話をしよう．貴きムニの方々．お聞き下され．」と言って語られた．

昔，ウルカームカ (Ulkāmukha) という名の賢い王があった．(1) 感官を制し，虚言を語らず，日毎，社へ赴き，喜捨をしてバラモンたちを喜ばせておいでだった．(2) 王妃のプラムグダー (Pramugdhā) はその顔ばせ蓮の如く麗しく貞淑な方であった．王はバドラシーラ河 (Bhadrashila nadī) の岸辺でサティヤ神のヴラタを行なっておられた．(3) ちょうどそこへ，一人の商人がやってきた．〔その船には〕商いのため数多の財宝を積んでいた．(4) 商人は船をその岸へ着け，王の側へ行き，ヴラタを行なう王に恭々しく尋ねた．(5) 商人が言うには，「陛下，真心をこめて何をなさっておられますか．どうぞお説き下さいまし．一部始終をお伺い致しとうございます．」(6) 王は答えて「商人殿，男子等の宝に恵まれるようにと，家人と共に，御威光比類なきヴィシュヌ神の礼拝とヴラタを行なっておるところじゃ．」(7) 王の言葉を聞くと，商人は恭々しく申し上げた．「陛下，私めに詳しくお話し下さいまし．お教え下さる通りに致しましょう．(8) 私めにも世嗣がございません．そのヴラタの御利益で必ず恵まれましょう．」それから商人は商いを打ち切り喜び勇んで家へ帰った．(9) 妻に子宝に恵まれるというヴラタについて話した．「子供を授かったらその時ヴラタをしよう．」(10) このように，商人はその妻リーラーヴァティー (Līlāvatī) に言うたのである．ある日，その貞淑な妻のリーラーヴァティーが，(11) 夫と共に喜びを分かちあった．すると妻は，サティヤ神の御慈悲により身籠った．(12) 十月目に珠玉の如き女児が生まれた．日毎，大きくなる様は満ちゆく月を思わせた．(13) 月に寄せてカラーヴァティー (Kalāvatī) と名付けた．その時，リーラーヴァティーはやさしく夫に尋ねた．(14)「なぜ，一度お誓いになったヴラタをなさりませぬか．」商人が答えた．「ああ，心配なさるな．この娘の婚礼の時にヴラタをしよう．」

(15) このように言うて妻を安心させ，街へ出た．それから，娘のカラーヴァティーは父の家で成長した．(16) 街で友達といる娘を見ると，商人は父親の務めをわきまえ，使者を遣わした．(17)「娘の結婚相手にふさわしい立派な婿を探せ．」との命を受けて，使者はカーンチャナの都 (Kāñcana nagara) へ行った．(18) 使者はその都から，ある商家の子息を連れ帰った．商家の子息が，徳も具え，容姿も端整な若者であるのを見て，(19) 商人は友人，縁者共々大いに満足し，儀式に則って娘を子息に嫁がせた．(20) しかし運命の然らしむるところにより，婚礼に際して最高のヴラタを為すことを失念してしまい，神の怒りを招いた．(21) そののち，家業に熱心で敏腕の商人は，婿を連れて商いに出た．(22) 岸辺の美しい都ラトナサーラ[1] (Ratnasāra pura) へ着くと，婿と共にすぐに　商いを始めた．(23) 二人がチャンドラケートゥ (Candraketu) 王の美しい都へ着いたその時に，サティヤ・ナーラーヤナ神は，(24) 商人が約束を破ったのを知り，呪詛を発せられた．「この者に恐しき，辛き，大いなる苦あれ．」(25) ある日，盗賊が王の宝を盗んで二人の商人が泊まっているところへやって来た．(26) 追手が迫るのを見て恐れをなし，宝をその場に残してすばやく身を隠した．(27) 追手は無実の商人たちのところへ来ると，そこに王の宝を見つけたので，二人を捕えて連れ帰った．(28) 喜び勇んで御前へ馳せ戻り，申し上げた．「盗賊二人をひっ捕えて参りました．御覧の上，御下命頂きとうございます．」(29) 王の命が下るや，取調べもなく固く縛り上げて城中の獄に閉じこめた．(30) サティヤ神の幻力のために，二人の言うことに耳を貸すものはなかった．さらに二人の財産をも，チャンドラケートゥ王が没収してしまった．(31) この呪詛により，家にあった妻も大いに苦しめられた．家にあった財物は悉く，盗賊に奪われた．(32) 妻は，身も心も疲れ，果て飢えと渇きに苦しんで，戸口に立って食べ物を乞うて歩いた．(33) 娘のカラーヴァティーもまた，日毎物乞いをして廻ったが，ある日のこと，飢えに苦しんでバラモンの家へ行った．(34) そこで，サティヤ・ナーラーヤナのヴラタを見た．近くにすわって物語を聞き，神にお恵みを願い，御下がりを頂き，夜になって家へ帰った．(35) 母は娘のカラーヴァティーにやさしく尋ねた．「おまえ，夜分どこに居なさったの．何を考えていなさる．」(36) 娘はすぐに母に答えた．「母上，　バラモンの家で願いをかなえてくれるヴラタを目にしたのです．」(37) 娘の言葉を聞くと商人の妻はたいへん喜んで，サティヤ・ナーラーヤナのヴラタを行おう，と思った．(38) 妻は親類，縁者と共にヴラタを行った．「夫と婿の二人を即刻家へ戻らせたまえ．(39) その罪を赦したまえ．」このヴラタによってサティヤ・ナーラーヤナ神の怒りは解けた．(40) 神はチャンドラケートゥ王に夢を見させたもうた．「徳高き王よ．夜が明けたら，獄中の商人二人を釈放するがよい．(41) 汝が没収した一切の財物も即刻返すべし．さもなくば，汝の国も宝も愛児も滅ぶものと知れ．」(42) このように王に告げて神は姿を消された．その翌朝，王は側近を従えて (43) 議場に座を占め，人々に自分の見た夢のことを語られた．「獄にある商家の者二人を即刻釈放せよ．」(44) との王の命を受けて廷臣らは二人を獄から出し，王の御前へ引出して恭々しく申し上げた．(45)「商家の者二人，足枷を解いて連れて参りました．」二人の商人はチャンドラケートゥ王に平伏し，(46) かつての事を思い出して恐ろしさに声もなかった．王は二人を見て丁重に声をかけられた．(47)「運命により，たいへん辛い目に遭いなされたが，もう恐れることはない．」足枷をはずさせ，ひげも剃らせなさっ

た．(48) 王は二人に衣服，装身具を与えて大いに悦ばせ，丁寧な言葉をかけて大いに悦ばせた．(49) かつて没収された財物は二倍にして返された．そののち，王は二人に家へ返るよう命じた．(50) 二人の商人は王に向かい平伏し，「陛下の御慈悲により，帰りつくことができます．」と申し上げて故郷へ向かった．(51)

これにてスカンダ。プラーナ，レーヴァー編，サティヤ。ナーラーヤナ。ヴラタ。カター，第三章終わり．

註1　ヒンディー訳では‘Ratnapura’とある．

第　四　章

スータは語られた．「商人は道中の無事を神に祈って旅立った．バラモンたちに喜捨をしたのち，街へ向かった．(1) 少し進んだ時，サティヤ。ナーラーヤナ神は商人に，「汝の船には何が積まれているか．」とお尋ねになった．(2) おごりたかぶったこの二人は嘲笑して言うた．「やあ，行者よ．何でお尋ねになる．金が欲しいのかな．(3) この船にはつる草，木の葉を積むだけじゃ．」この不遜な返答を聞くと行者は，「その言葉，まことなれ．」(4) と言い放って即座に船を離れ，少し行って河岸に立った．(5) 行者が立ち去った後，商人は日々のお務めを済ませた．その時，船が先刻よりも浮き上がっているのに気付いて仰天した．(6) 見れば，荷がつる草の類ばかりになっている．商人は卒倒した．意識が戻ると悲嘆にくれた．(7) その時，婿がこう言うた．「嘆いたとて詮ないこと．行者の呪いがかかったのでございましょう．(8) きっとあの方には，一切不可能なことはないのです．ですから，あの方に御加護を乞えば，願いは必ずかなえられますよ．」(9) 商人は婿の言葉を聞き，行者のもとへ向かった．行者の姿を見ると，真心をこめて行者に拝礼して恭々しく言った．(10)「尊者に対し，不遜なことを申しました．どうか罪をお赦し下さいませ．」悲しみにうちひしがれて，このように何度も頭を下げた．(11) 行者は商人が嘆くのを見て声をかけられた．「嘆くをやめ，我が言葉を聞くがよい．汝は我を侮り，礼拝を怠った．(12) 我が命により，愚かな汝は重ね重ね苦しみを享けた．」この神の言葉を聞くと，彼は礼讃を為そう，と念じた．(13) 商人が申し上げるには，「御幻力に惑わされては，梵天を始めとする天にいますすべての神々でも御姿や御属性を見分けることができません．驚くべきことでございます．(14) 愚かな私めが御幻力に惑わされて分かろうはずもございません．御怒りをお鎮め下さい．下僕は持てる富に従い，能う限りの礼拝を致します．(15) 先の積荷一切とおすがり致しておりますこの下僕を守りたまえ．」誠心こもったこの言葉に，ヴィシュヌ神 (Janārdana) は満足なさった．(16) 望みのものを与えて神 (hari) は姿を消された．そこで商人は，船に乗り，積荷が元通りに満載されているのを見て，(17)「サティヤ神の御慈悲により，我が望みは叶えられた．」と言い，一行の者たちと，作法に則って礼拝を為し，(18) サティヤ神の恵みにより，喜びに満ちあふれ，船を慎重に整備して故郷へ向かった．(19) 商人は婿に言うた．「御覧．我らがラトナプリー (Ratnapuri) じゃ．」荷の見張番を使者として遣わした．(20) 使者は街へ行き，商人の妻に会い，合掌して拝し，吉報を告げた．(21)「御主人様と御婿君は，一行の者を連れ，大いなる財宝を積んでこの街の近くにお帰りになりました．」(22) 使者の

口よりこの言葉を聞いて，貞女は大いに喜び，サティヤ神に礼拝したのち，娘に言うた。(23)「私は出迎えに行きます．そなたも急ぎ来なさるがよい．」母の言葉を聞いて，娘は，ヴラタを為し，終えると，(24)御下がりを頂かないままその場に残して，自分も夫のもとへ駆けつけた．サティヤ神はそれを怒り，婿と船を(25)奪い去り，財宝ともども水に沈めておしまいになった．そこでカラーヴァティーは夫の姿が見えず，(26)あまりの悲しみにその場に泣き崩れた．商人は，船が沈み娘が悲嘆にくれる有様を見て，(27)恐れおののいて言うた．「さても不思議のことじゃ．」船乗りたちも皆怖れた．(28)その時，娘の様子に仰天したリーラーヴァティーは，おろおろと泣き嘆いて夫に言うた．(29)「婿君を乗せた船が一瞬のうちに姿を消してしまったのは何故でございましょう．一体どの神を蔑ろにしたために，船をさらわれたのでしょう．(30) サティヤ神の御威光をだれがはかり得ましょうか．」こう言って一行の者たちと共に嘆いた．(31)娘を抱きしめて泣いた．その時，娘のカラーヴァティーは夫を悲しむあまり(32)彼の杏を抱いて，そのあとを追おう，と心を決めた．[1]娘の所作を見て，心やさしい商人とその妻は，(33)耐え難い苦しみに身を焼かれた．商人は法をわきまえるが故に，考えた．「恐らくは，サティヤ神に船をさらわれ，その幻力に惑わされているのだろう．(34)持てる富に従い能う限りのサティヤ神礼拝を為そう．」と皆を呼び集めて思うところを告げた．(35)繰り返し，サティヤ神に五体投地の礼拝を行なった．すると，苦悩する者をお守り下さるサティヤ神は，(36)信徒への御慈愛から，お声をかけられた．「汝の娘は夫に会うため，御下がりをそのまま残してやって来た．(37)故に，娘婿は忽然と姿を消したのである．家へ行き，御下がりを頂いてからまた来るならば，(38)必ずや汝の娘は夫に会うだろう．」 娘は天界からこのような言葉を聞き，(39)すぐに家に向い，御下がりを頂いてから，またひき返し，夫に会うことができた．(40)そこでカラーヴァティーは，父親に向かって言うた．「さあ，父上．もう家へお帰り下さいまし．ぐずぐずなさることはございませぬ．」(41)商人は 娘のこの言葉をうれしく思って同意した．サティヤ神の礼拝を作法に則って行なって後，(42)一行をひき連れ，財宝を持って，家へ 帰った．満月の時と，サンクラーンティ[2] (sankrānti)の時に，サティヤ神の礼拝を行ない，(43)この世で安楽を楽しみ，死後はサティヤプラへ行った．(44)

これにてスカンダ・プラーナ，レーヴァー編，サティヤ・ナーラーヤナ・ヴラタ・カター，第四章終わり．

(註)1　彼の杏を抱いて ...　ヒンディー訳には焼身(サティー)を決意した，とある．

2　太陽が一つの天宮から，次の天宮に移動する日．

第　五　章

スータは，「さて，先の話をしよう．貴きムニの方々よ．お聞き下され．」と言って語られた．

トゥンガドゥヴァジャ (Tuṅgadhvaja) という名の熱心に臣民を守護する王があった．(1)この王はサティヤ神への供物の御下がりを頂かなかったので難儀な目に遇った．ある時，王は森へ行き数多の獣を狩って，(2)バンヤン樹の根元へ来ると，牛飼いたちが，家族を連れ，誠の心より礼拝

を為しているのに出遇った.(3) 王は傲れる心により，見ても近づかず，拝さなかった．その時，牛飼いたちは皆，王のもとに御下がりを置き，(4) また〔もとの場所に〕帰って，思い思いに頂いた．その時，御下がりを頂かなかったために，王は辛い目に遇った.(5) 百人を数えたその王子達も,財貨や穀物も，すべて滅び去った．〔王は〕「サティヤ神がすべてを滅せられたに相違ない.(6)ならば〔サティヤ〕神の礼拝をしていたかの地へ行こう．」 と意を決して牛飼い達のもとへ行った.(7) そして，牛飼い達と共に，作法に則って，真剣にかつ敬虔にサティヤ神の礼拝を行なった.(8) サティヤ神の御慈悲により，財貨や息子に恵まれて，この世で安楽な一生を送ったのちにサティヤプラへ行った.(9) 正にかけがえなきこのサティヤ神のヴラタを為す者，また，真摯な心をもって，まこと功徳あるその物語を聴く者は，(10) サティヤ神の御慈悲により，財貨や穀物などに恵まれる．貧しき者は富を得，囚われ人は鎖より解かれる.(11) 怖れる者は怖れより解かれる．このことは必定であって疑いない．願い通りの御利益を享け，死後はサティヤプラへ行く.(12)「と，このように，人がそれを為せばすべての苦しみから解かれるというサティヤ・ナーラーヤナ神のヴラタは説かれたのじゃが，さて，バラモンの方々よ.(13) 特に悪しきカリの世にあって，サティヤ神の礼拝は御利益ある有難いものじゃ．この神をあるものはカーラ（Kāla）と呼び，ある者はサティヤ，ある者はイーシャ（Īsha）と呼ぶ.(14) またある者はサティヤ・ナーラーヤナと呼び，サティヤ神と呼ぶ者もある．様々な姿をとられてすべての者の願い事を叶えたまうのじゃ.(15) カリの世において，ヴィシュヌ神(Sanātana) はサティヤ・ヴラタの姿をとって現われたまう．ヴィシュヌ神がとりたもうた化身であって，すべての者の願いを叶えてくれる (16) このヴラタを常に読誦し，聴聞すれば，その者の罪障は，サティヤ神の御慈悲により消えさるのじゃ.(17) では尊きムニの方々よ．先にサティヤ・ナーラーヤナ神のヴラタを行なった人々のその後に享けた生について申し上げよう.(18) 大智あったシャターナンダ（Shatānanda）は，バラモンのスダーマー (Sudāmā) となり，クリシュナ神を心に念じて解脱を得た.(19) 薪担ぎのビッラ族[1]の男 (bhilla) は，グハ王（Guharājan) となり，シュリー・ラーマの為につくして解脱を得た.(20) 立派な王であったウルカームカは，ダシャラタ（Dasharatha）王となりシュリー・ランガナータ（Shrī Raṅganātha）を拝して，シュリー・ヴァイクンタ[2] (Shri Vaikuṇtha) へ行った.(21) 敬虔にして誓いに忠実であった商人は，モーラドゥヴァジャ（Moradhvaja）となり，（我子の）体[3]を円盤(チャクラカ)で[4](まっ二つに)切って捧げ，解脱を得た.(22) 偉大な王であったトゥンガドゥヴァジャは，スヴァーヤンブヴァ (Svāyambhuva) になり，あらゆる方法でヴィシュヌ神の礼拝を行ない,[5] シュリーバイクンタに行った，と伝えられる.[6] (23)

これにてスカンダ・プラーナ，レーヴァー編，サティヤ・ナーラーヤナ・ヴラタ・カター，第五章終わり．

註1　山間に住む未開種族

2　ヴィシュヌ神の天国

3　異本(1)は「妻と二人して息子の体を半分にひいた」としてこれにまつわる話を記している．異本(2)はこれをマハーバーラタにもとづく話として「おのれの体を半分にひかせた」と記して

いる．クリシュナが身をやつしたバラモンの子のためにわが身をのこでひかせたラトナナガラの王マユーラドゥワジャの話が‘Jaimini Ashvamedha”に伝えられている．（M. M. Siddheshwar Shāstrī Chitrao, Bhāratvarṣīya Prācīn Caritrakosha, Puna, 1934）

4　ヒンディー訳ではのこぎりとしている．異本(1)〜(4)いずれもKrakaca（のこぎり）になっている．

5　異本(1)は原文の‘Sarvān bhāgavatan kritvā ...’を「バーガヴァタ（プラーナ）をすべて聴聞し...」と訳し，異本(2)及び(3)は「すべての臣下をバガヴァーンの信徒（ヴィシュヌ信徒）にして」と訳す．異本(4)は「バガヴァーンに関することなし...」とする．

6　Svāyambhuva iti smṛtaḥ とあるが，異本(1)はSvāyambhuvo ʃ bhavat kila，異本(2)〜(4)はSvāyambhur abhavat kilaとする．

（訳・註　　田辺美保）